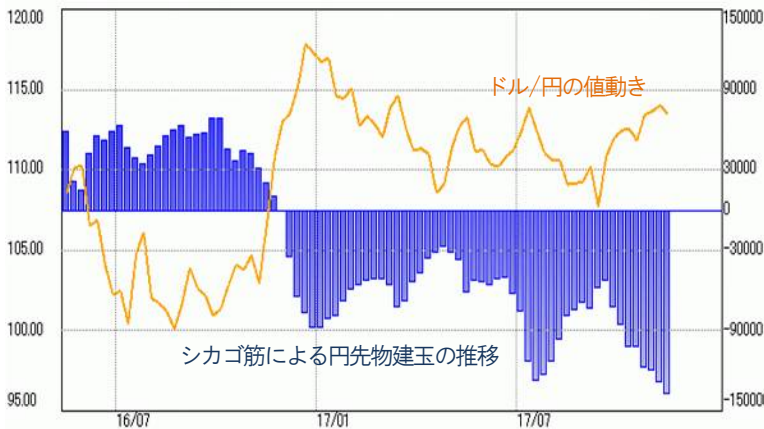


■ テクニカルに下げたドル/円の戻りに期待

周知のとおり、昨日（23日）の米国は感謝祭の祝日で休場。その日に備えて事前に手持ちのポジションを整理しておこうとする動きが強まったことは紛れもない事実で、ことドル/円に関しては9月初旬以来の上昇で積み上がった投機筋の円売り越しが相当程度巻き戻されることになったものと見られます。



左図に見るように、シカゴ通貨先物取引市場における投機筋の円売り越しは11/14時点で13.6万枚にも達しており、さすがにそろそろ買い戻されること必至の状況にありました。そこに米国の感謝祭の日経が重なったわけですから、結果的に足下で円高・ドル安の流れが見られるようになるのも道理であると言えるでしょう。

例えば、9/8のドル円の安値は107.32円で、直近（11/6）高値は114.73円でした。

つまり、わずか2か月間で7円以上も円安方向に振れたわけですから、一時的にもその反動は大きく生じます。この上げ幅に対する半値（50%）押しというのが111円ちょうどあたりの水準であり、足下では同水準あたりで一旦下げ渋っている状況も確認することができます。

下図にも見られるように、今週22日のドル/円は一目均衡表の日足「雲」上限に加えて200日線、89日線と重要な節目を次々に下抜ける市場に弱気の展開となりました（おまけに、日足区の遅行線は一気に日々線を下抜けました）。当然、これらの節目は「容易に下抜くことが難しい」と見做されていたものであり、それだけにストップロス・オーダーを巻き込む動きも急になったものと見られます。



もちろん、急激な下げのきっかけとなったのは22日のNY時間に公表された10月開催分のFOMC議事録の内容において、インフレ鈍化への警戒感がやや強めに示されたことにあつたわけですが…その下げ幅や勢い、一旦下げ止まった水準などは多分にテクニカルな要素に関わるものであつたと言えるでしょう。

ようは、投機筋による円売り越しが課題に膨れ上がっていたこと、感謝祭の日程が近づいていたこと、複数の重要な節目が集中していたところを下抜けたため余計に下げが加速しやすくなったことなどが急落の要因としては大きく、いきなりドルの価値が損なわれたわけではないということを再確認しておきたいと考えます。よって、米国の感謝祭の祝日が明けて、さらに週明けとなる11/27以降は、感謝祭前とは逆の流れが見られる可能性も大いにあると考えます。

ようは、投機筋による円売り越しが課題に膨れ上がっていたこと、感謝祭の日程が近づいていたこと、複数の重要な節目が集中していたところを下抜けたため余計に下げが加速しやすくなったことなどが急落の要因としては大きく、いきなりドルの価値が損なわれたわけではないということ

(11月24日 11:40)